

---

# お師匠様と私

和広

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

お師匠様と私

### 【Nコード】

N2431B

### 【作者名】

和広

### 【あらすじ】

少年は剣の修業をしている。彼はある女性に師事して日々剣の腕を磨いていたそんなある日のお話。

青空の下、森のなか。麗らかな日差しが柔らかい花の咲き誇る季節。雪解けもとうに終わった今の時節に粗末なほったて小屋のすぐ脇で薪を斬る乾いた音が響いていた。少年が薪を割っているのだ。

「ていつ」

また少年が掛け声とともに特製の薪斬り台へと斬撃を下ろし、薪を作る。少年は最近手に馴染んできた得物を自然に提げ、空いた手で額の汗を拭った。

「ふう……」

彼が手に持っていた得物は鉈ではなく、剣だった。細身で長さも少年に合っており、それを持つ彼の姿もなかなか様になっていた。

と、彼の背後に一人の女性が歩み寄った。自然体で歩いているように見えるが足音はなく気配すらなく、その姿は空に舞う蝶のように内から染み出る優美さを持っていた。

彼女は気付かれる事無く少年の背後に立つと、

「コラッ！ サボってんじやない！」

拳を振り下ろした。

少年はその痛みに声もなく崩れ落ちる。頭を抱えた少年は背後の女性を見上げて控えめに反論する。

「師匠おゝ、サボってませんよう。ほら、今日の分は終わってます」

言われた師匠なる女性は眉を訝しげにひそめて辺りを見回す。今日の分として少年に渡した薪の山は右側に有るはずだが、当然一本も見当たらない。

それを確認した師匠は再びその鉄拳を少年の頭に打ち下ろす。

「イダツ！ な、何するんですか!？」

「やっかましい！ お前、ここの薪をどこやった！ ズルしようつたつてそうはいかないよ」

師匠の女性はひどくご立腹の様子で、少年は果てしなく理不尽を感じる。薪斬り台の周辺に散らばった割られ済みの薪の数々を指差し果敢に反論する。

「何言ってるんですか！ 今日の薪は全部斬り終わってたんですよ！」

言われた師匠は再び注意深く辺りを見回した。割られた薪は台の左右に山を作っており、その大きさは大体今日の分の薪が作るであろう大きさのように思える。どんなズルでこんな巧妙な演出を作ったのか見破ろうとしているらしく目を皿のようにして見回す。

と、そこに至って師匠は彼が本当に薪割りを終えた可能性に思い至った。目を凝らして確認してみる。

「……あらホント、終わってるわ。早かったねえ」

「そうでしょう？ 毎日やってたらそりゃ早くもなりますよ。僕だって頑張っ取り組んでますからね。なのにどうして僕は二回も殴られるのですか」

ガッツ、と本日三発目の鉄拳が炸裂した。

同じ場所の強烈な痛み少年は涙目になる。

「師匠の言葉にケチつけるんじゃないよ。まあ前二回殴ったことを謝るのはやぶさかでもないがね」

師匠は言うだけ言って肝心の謝罪をせずに小屋の前まで歩いて行く。少年は片手で頭を押さえたまま慌てて彼女の後を追った。

二人は家の前にある拓けた場所まで来る。

「さて」

言葉と同時に師匠は唐突に振り向いた。彼女は手に黒塗りの大太刀を持っていた。艶のある漆黒の鞘は鯉口にはきらびやかな細工が施されており、それが相当の刀である事を表している。

師匠は不敵な笑みを浮かべながら鐔を親指で跳ね上げ、わずかだけその刀身を覗かせる。

「まずは昨日覚えた『奥義』の型を復習しようか」

「はい！」

少年は剣を手に精神を集中させる。視線が鋭く、まるで射るようなものに変わっていく。

彼は彼女の下で剣を修業しているのだ。その才能たるや恐るべき事に、まだ若いにもかかわらず磨きに磨き上げ磨き抜いた彼女の持てる技を次々と、まるで乾いたスポンジのように技術という水を吸収していくのだ。師匠を抜く日もそう遠くないだろう。

そして彼は昨日、彼女の最大最強最高技巧という形容が相応しい『奥義』をとつとつ教授された。

「はい、初手！」

師匠の張り上げる声を引き金に少年は動きだす。流れるような素早い動きで大上段の構えから一瞬五撃、袈裟斬りのあと剣尖を後方に流し、構える。

「次手！」

少年は声を合図に踏み込み、迷いのない速い動きで剣を右奥から振り抜く。返す手で強引にもう一刀、そして鋭い突きに終わる。自然な動作で舞い、風を起こす事さえなく空気に溶け込む斬撃が繰り出される。

「再次手！」

突き出された剣をそのまま振り、隙を斬撃と化す。

刃は夢幻のように現われては消え、舞い上がる埃さえも両断する。

「締手！」

その言葉とともに少年は我が身のように剣を舞わせる。刃は止まることを知らぬかのように、華麗に熾烈に空を切り裂く。

「終手！」

少年は剣を振り切り、剣はブレる事無く完全に静止する。

腕を組んでそれを観ていた師匠は静かに少年を見据えていたが、やがて鼻を鳴らした。

「まあ、型に狂いはないわな。四部組複合連続技のこの奥義をよく覚えたよ。褒めてやってもいいねえ」

そうは言つが実際に称讃の言葉は送らない。少年はもう彼女のそ  
ういふところに慣れてしまったので余り気にしない。師匠は話を続  
ける。

「じゃあ次は、私が教えた数々の大技小技を憶えてるかテストしよ  
うか」

「はい！ 今まで教えてくれた技は全部ちゃんと憶えてますよ！」

少年は元気よく答える。師匠はピクリと眉を寄せ、頷いた。

「じゃあ、アンタが憶えるのに三日かかった、私が十六番目に教え  
た技を……」

「待つて下さい、そんな技の特定に時間が掛かるような出題の仕方  
しないでください」

少年は思わず師匠に突っ込んだ。師匠は不機嫌そうに言う。

「なんだと？ 師匠がいつなんどきどこで何を言ったのかくらい後  
生大事にシツカリと憶えておけよ」

「無茶言わないで下さい」

少年はすげなく返す。師匠はやや傷ついたような顔で少年を見つ  
めるが、少年は剣を構えて精神集中している。完全無視。

演技だと気付かれていることに気付いた彼女は顔を僅かにしかめ  
た。

「ちつ、つまらんヤツだ」

「初めはその手に幾度となく引つ掛かりましたから。いい加減慣れ  
ましたよ」

表情を変えずに返す少年へつまらなそうな溜め息を聞こえよがしに吐き、気を取り直したように言う。

「まあいい、試験やるか。じゃあ、五番技『月弦』から続けて十番技『飛降』」

「はい！」

少年は踏み出すとともに彼女の告げた技を忠実に繰り返す。風を切る音が二度鳴り、余韻もなく静止。

師匠は唸り、何故か悔しそうに声を張り上げる。

「八番技『突基』から十六番技『旋翔』、十二番技『降突』！」  
「はい！」

少年は師匠の言葉通りに技を繰り返す。狂い無く迷い無く技は巧みに再現され、繋ぎにも文句の付けようがない。素早い足捌きも大したものだ。

師匠はなお唸り、躍起になったような大きい声で少年に言う。

「くう……。二番技『斬返』から六番技『烈刀』、七番技『昇突』  
続けて九番技『降斬』、繋げて十一番技『剛翔』締め十番技『飛降』を決める！」  
「は、はい！」

こなす技数が増えて少年は焦るが、手元にまでそれが伝わることはなかったらしく確実に技を次々と繰り返した。最後の技を決めたあと、少年は安堵の溜め息を吐く。

思わず地団駄を踏む師匠は、自分へ向けられた少年の冷やかな視線に気付いた。わざとらしい咳払いで姿勢を正す師匠に少年は告げる。

「十番技『飛降』は二回目ですよ。各技の試験なんですから同じ技をする必要はありませんよね？」  
「う？！……な、生意気だぞっ」

師匠は彼の反論に言葉を詰まらせ、そしていつも通り苦し紛れに拳を叩き下ろした。

が、少年は軽やかな身のこなしでそれを躲す。

「あ、避けるな莫迦！」

「そりゃ避けますよ理不尽な暴力なんか受けたくありません！ 最近の師匠は道理がなくなってませんよ」

辛辣な批判に師匠は怒りを覚えたようだが、しかし少年の言葉も一理あるので彼女は珍しいことに大人らしくグツと堪えた。

「閑話休題。まあ試験には合格をくれてやらないこともないな」

「ずいぶん婉曲な言い方しますね。たまには素直にならないといつまで経つても結婚出来……」

少年の言葉を彼女は眼光で止めさせる。だが、口元に小さく笑みを浮かべながら頷いた。

「そうね、技は完璧に憶えているようで何より。相当昔に教えた技も軽んじずちゃんと復習してるのはとても偉いね、いい子だ」

なんと師匠が少年を率直に褒めた。……ギラギラと睨みを利かせたまま。

どうやら天変地異の心配は要らないらしい。

「まあ、私が教えることはもうないわな。技も全部持つてかれたし溜め息を吐きつつ彼女はそう続けた。少年はその言葉を聞き、大喜びする。」

「わあ、本当ですか?! やったあ、ありがとうございます!」

まさしく欣喜雀躍といった様子で喜ぶ少年を師匠は穏やかな笑みとともに無言で眺めた。

やがて、口を開く。

「オイ、まさか私の下で師事するのが終わったみたいじゃないだろうね?」

「え? ……どういう意味ですか?」

少年ははしゃぐのを止め師匠たる女性を見る。彼女は見ようによつてはとても穏やかな笑みを浮かべていた。……また別の見方をすれば、とても嫌らしい笑みを浮かべている。

「バーカ、まだ終わるわけないだろうが。スポーツじゃなくてホンモノの剣術を憶えるんだろ? 今日はよくやったからもう止めて良いが、明日からはもっとビシバシやるからな」

「ええー?!」

少年は悲壮な顔で大声を上げる。彼はそのまま反論に打って出た。

「なんでですか! さっき『私が教えることはもうない』って言うてたじゃないですか!」

「どアホウ」

ガッツ、と少年の頭頂部に鉄拳が炸裂。少年は頭を抱えて崩れ落ちる。

久々のクリーンヒットに満足気な笑みを見せる師匠は少年に言った。

「オマエはまだ技の『型』を憶えたただけだろーが。自然に技が出せるくらいに体に技を憶えさせる『定着』ってのが次の目標だ」

痛み以上の理由から立ち上がるこの出来ない少年を見て、師匠はニタリと笑みを浮かべた。

「ちなみに定着したら次は実戦で剣を振ってるうちに自然に技を出せるように体に馴染ませるのを目指す。その次に自然に技が連続して出るように剣術を体で憶えて、その次に各技のアレンジ。つまり戦況に応じて技の型を微妙に変えられるようにする。コイツが終われば……」

「うわああああん、もういいです！ 言わないで下さい！！」

少年は絶叫して跳ねるように立ち上がった。師匠はニタニタ笑いを納めずに少年の頭を乱暴に撫でた。少年は突然何をされたのかわからず目を白黒させる。

師匠は少年の頭から手を離すと笑顔で言う。

「今日の御飯はハンバーグでヨロシク」

「へっ？」

少年が間抜けな声で返事したときにはもう彼女は身を返しており小屋に向かって歩いていった。少年は慌てて追い掛ける。彼は師匠の隣に並ぶと、師匠たる女性を見たと言った。

「師匠、自炊くらい出来ないといつまで経っても結婚出来……痛あ  
！」

彼女は全てを言わせなかった。少年の側頭部にお馴染みの鉄拳を叩き込む。

吹っ飛んだ少年を見て、彼女は自然に微笑んだ。その微笑みは、春風のようにとても優しくかった。

「たわけ、生意気言うのは私を越えてからにしな」

相変わらず口は悪いが。

ところで、本来は技の型を教えて、それが定着するのを見届けたら師匠というのは弟子を突き放して修業させるのを兼ねて師事を修了するものと聞く。だが、今の言い方から察するに最後まで面倒見る気のようにだが？

私は丸テーブルを挟んで対面に座る彼女にそう問い掛けた。彼女は頬杖をついたまま答える。

「アイツは抜けてるから、下手に放り出すとアッサリ死にそうだからね」

少年はキッチンで包丁を振るっているはずだ。彼は料理がすごく上手い。

と、肉を焼く食欲をそそる音がした。その音を聞きながら彼女はニヤリと笑みを浮かべて言った。

「それに、あの料理係を手放すのは惜しいだろう？」

少年の師匠たる女性は彼にとってモノスゴク酷なことを平気で言った。私は嘆息して彼女に言う。

「そんなことを言っつて、本当は愛弟子と離れたくないだけだろう？」

「なっ、馬鹿を言っつな。私は……」

「はいはいはい、お喋りはそこまで。料理が出来ましたよ」

絶好のタイミングで少年が器用に三枚皿を持ってやってきて、彼女を遮った。

失笑する私に彼女はドスの利いた睨みを飛ばすが、その手には既にフォークが握られていて、逆にとても可愛らしい。

少年はハンバーグが盛り付けられた皿を自分の師匠の前に置きながら言う。

「はい師匠、お望みのハンバーグですよ」

「ああ。……明日から修業は昨日今日よりうんと厳しくなるからね……！」

突然の宣告に目を丸くしたあと悲鳴を上げる少年を尻目に、彼女はパクパクとハンバーグを食べ始めた。

私はそんな二人のやりとりに目を細める。私は気休めに言葉を掛けた。

「頑張れよ、少年」

「……ええ、はい。ありがとうございます。前向きに取り組みますよ」

肩を落とす少年に私は益々笑みを深めた。

私は二人の修業する様子を毎日飽きもせず小屋の窓から眺めるだけだが、もちろん私も彼の成長を心から願っている。明日からの特訓も楽しみだ。

さて、目の前の美味そうなハンバーグを食べるとするか。……復讐とばかりに私のハンバーグを狙う彼女に応戦しながらだが。

(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ この話は三人称視点で話が進むかと思いきや、実は窓から覗いていた『私』の一人称視点で進んでいたという話です。分かりにくかったらすみません

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2431b/>

---

お師匠様と私

2008年11月7日07時22分発行